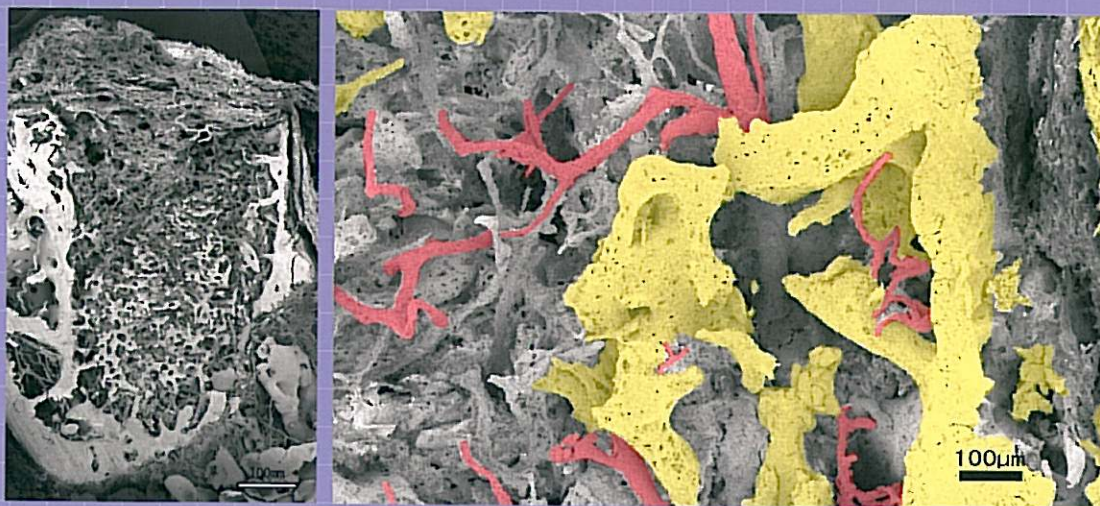


日本歯科評論 6

THE NIPPON DENTAL REVIEW

June 2012 No.836 Vol.72(6)



大阪歯科大学 解剖学講座
諏訪文彦先生 (私の研究室から)より

〈特集〉

その抜歯, 大丈夫ですか?

小佐野貴識・今村栄作・川田賢介・蒔生田整治・新井 剛・加部晶也・内田剛也・齋藤知之

インプラント時代の歯周治療と補綴治療の接点を考える

——2. 長期経過症例から学ぶ歯周補綴の役割

高島昭博

“DH”あなたの出番です!

患者さんに寄り添い, 患者さんの人生を思う歯科医療を目指して

中山亜由加・桐野晃教

Topic

周術期における口腔機能管理の意義と実際

——東邦大学医療センター大森病院周術期センターの取り組みから

落合亮一・関谷秀樹・福井暁子・堀江彰久

学際的学問分野の位置付けとしての歯科医療

なかはら えつ お
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



十数年前から、「Interdisciplinary Approach(学際的アプローチ)」や「Multidisciplinary Approach」あるいは「包括的歯科医療」……といったさまざまな表現において、矯正や口腔外科、歯周病など、歯科分野における細分化した各専門分野を束ねて治療に貢献しようとする考え方が、先進的歯科医療としてクローズアップされてきた。

しかし、真の意味での“学際的学問分野”とは、歯科以外の学問分野との関連付けにおける学問的成果のことである。歯科界で一般に言われているのは、同じ歯科領域内の細分化した専門的学問分野同士の関連付けであり、これではあまりにも内輪めいている。たとえその領域を医科における各専門分野にまで拡大したとしても、まだまだ学問としては“内輪”の関連付けの範疇である。

それに対して、とりわけ法医学は、法学と医学の学際的学問としての草分けだろう。昨今では、抗加齢医学

がその期待と課題を背負って船出したところである。

21世紀は学際的学問の時代

アフリカ大陸を出た人類は、どのようなルートを辿って日本に辿り着いたのか。この壮大な人類の歴史は、分子人類学という新しい学問体系によって塗り替えられようとしている。20世紀末から急速に発展した人類学は、その背景に学際的学問分野としての位置付けを持つ、異なる領域の学問分野と研究分野が一同に協力し合い、有史以前の数万年前からなる人類の歴史の変遷を垣間見せてくれようとしている。

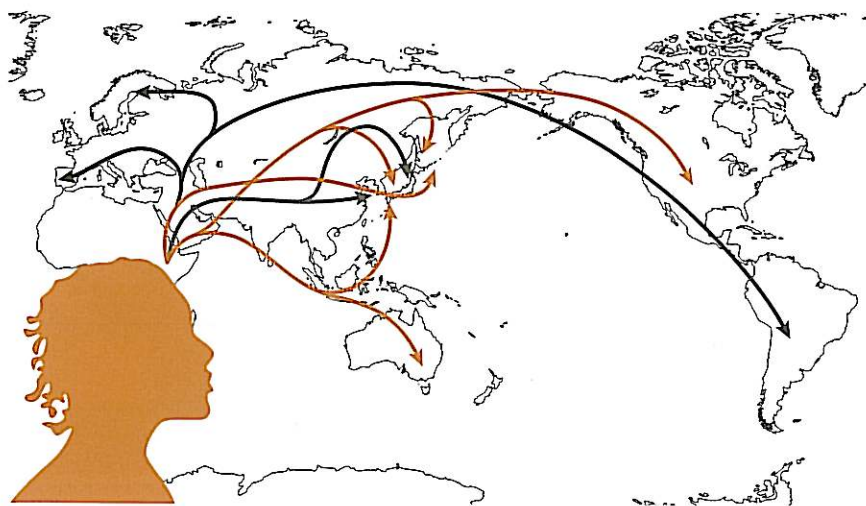
専門外の分野の学会では、お互いの共通言語の欠如や基礎知識の欠如により、排他的な局面に陥りやすいが、研究者たちの並々ならぬ努力のお陰で、私たち日本人の辿ってきた軌跡が解明される時代が到来しつつある。考古学、古細菌学、遺伝子学、地質学、物理学……特に放射性同位

体による年代特定精度の向上や、プレートテクトニクス理論解明への研究、さらには海洋生物学など、ありとあらゆる学問の、まさに“学際的アプローチ”により新たな分子人類学が体系付けられ、今日に至っている。

また2004年に、医学分野において咀嚼筋の大きさを左右する遺伝子が特定されたことで、頭蓋骨の大きさと咀嚼筋の発達との間に相関があることから、猿人から人類へと進化したきっかけがこの遺伝子の突然変異であると仮定し、当時、地球に影響を及ぼした超新星爆発がなかったかどうか、医学と天文学や航空宇宙学との学際的アプローチによりその真相究明が進められている。これはまさに、歯科領域からしても壮大な学際的アプローチである。

日本は人類学史上、
世界でも稀な人種の^{るつぽ}坩堝

歯科領域には、より身近に感じら



れるものもある。ミトコンドリア遺伝子多型ハプログループを頬粘膜や血液から簡単に調べることができるようになったため、グループごとの疾病リスクの研究が進んできているのだ。これは、たとえばⅡ型糖尿病のリスクが高いというように、具体的な疾病リスクを当てはめて予防に生かそうという試みである。そしてこのハプログループは、人類の母系ルーツをも探ることができる。

人類のルーツを探るにはもう1つ、Y染色体ハプログループによる父系ルーツを調べる方法がある。これらによれば、日本に辿り着いた人類は、世界でも類を見ない多様性を維持したまま現在に至っているという。

「現代のニューヨークは人種の^る坩堝^{つぼ}」とはよく言われるが、Y染色体およびミトコンドリアDNAを通して人類史を見ると、アフリカの1人の女性から始まった人類は、アフリカ大陸を出た後、何十というハプログループに分かれて日本に辿り着き、

そして現在まで共存しているのである。有史以前から日本はすでに“人種の^る坩堝^{つぼ}”だったというわけだ。

さらに興味深いのは、大陸を移動した軌跡の途中地域には残っていないハプログループが、日本では共存しているということである。中華文明発祥の地である中原^{ちゅうげん}辺りの勢力に追われ、日本列島まで逃げ延びた弥生人のルーツに当たる長江文明の流域には、もはや弥生人のハプログループは存在していない。すなわち、このグループ（弥生人）を温かく迎え入れる気質が、先行してすでに日本に辿り着いていた縄文人ハプログループにあったということだ。

またこれ以外にも、世界で日本にしかないハプログループがいくつも存在している。地球上のあらゆる地形の中で日本列島という特異的な環境が、日本の多様な文化や日本人の気質を、このように何万年もの時間の変遷を経ながら育んできたわけである。

*

補綴や修復を中心とした回復的歯科医療の時代はいずれ終焉を迎え、それに取って代わって、次は口腔を中心に、ありとあらゆる学問を関連付けた学際的学問分野の位置付けとしての歯科医療の時代が始まる。そして、やがては患者一人ひとりに適した関連付けを歯科医師自らが創造していかなければなくなる創造的歯科医療の時代が訪れるであろう。このように、知のパラダイムシフトはすでに始まっているのだ。

これから数十年をかけて現在の歯科医療は、医科と歯科の融合、さらに異分野との学際的学問分野の位置付けを経て、現在とは全く違う学問ないし臨床体系へと移行していくだろう。しかし、現在の回復的歯科医療が全くなってしまいうのではなく、その割合が緩やかに変化すると推測するのが現実的である。この臨床的なパラダイムシフトが加速するには、歯科医師だけの努力ではなく、隣接する医学や一見全く関係性を見出せないような学問、そして政治と行政をも巻き込んだ大きな変革の波が必要である。今はその準備の時と心得て、精進したいものだ。

*

2年間にわたり、このコラムにお付き合いいただき本当にありがとうございます。私自身、来る時代に備えて歯科以外の分野と関連付けた価値の再編集作業を試みて参りました。読者の皆様に感謝申し上げます。